

鈴木 はい。じゃあ始めたいと思いまーす。えっと、あの、前回、あの、宇多野病院の、あの、虐待事件の話、ちょっと出たと思うんですけど、2016年の8月か9月になんかそういう話があって。これ、具体的に何があったかって、野瀬さん、ご存じですか。

野瀬 うーん、僕はその、病院からの説明で聞いただけなので、現場を見たわけじゃないんで分からないんですけど。

鈴木 はい。

野瀬 看護師が、多分、患者さんに対して暴言を吐かれたみたいで。

鈴木 それの病棟って、どちらなんですか。

野瀬 あ、筋ジス病棟。

鈴木 あ、筋ジス病棟。で、あの一、何ていうんですかね、どなたかがあれですか、あの、なんかやっぱり、つ、通報したっていうか。

野瀬 恐らくそうです。

鈴木 あ、恐らく。複数の人が被害を受けたってことですか。

野瀬 うーん、僕は人数までは聞いてはないです。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 恐らく。

鈴木 うん。恐らく複数の人が、あの、そのぼうごん、暴言を受けたっていうことですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 えーっと、それまでそういう虐待事件とか、あったんですか。

野瀬 ま、(****コウニハ@00:02:01)なかったんですけど。僕とかに言ったりはしてました。

鈴木 ああ。例えば、えっと、なんか言われたこととあって。

野瀬 ま、言われたりも、それ、まあ、物理的にもそうだし。

鈴木 物理的にもそういうところは、そういうことですか。うーん。あの一、いわゆる、あの、何ていうんですか、たい、体にこう、何かこう、あの一、危害を加えるとか、そういうことはいないんですよね。

野瀬 いや、割と昔は、あったりもした。

鈴木 あ、あるんですか。要するに体を、なんかこう、たたくだとか。

野瀬 そう。

鈴木 あ、それもあったんですか。それは、昔ですか。

野瀬 僕が小学生のときとか。僕も、受けたりはして。

鈴木 あ、そうですか。看護師がたたくんですか。

野瀬 そうです。

鈴木 へー。

(無言)

鈴木 でも、それを何ていうんですかね、あの一、苦情を言える場所とあっていうのは、特に病院の中にはなかったんですか。

野瀬 当時はなかったです。

鈴木 ああ。い、今はどうなってるんですか。

野瀬 その虐待が大っぴらになったときに、苦情受け付け窓口を、確か、設置しはって。

鈴木 ふーん。

野瀬 多分、今、副院長と、その、療育指導室の一番上の人で、窓口にはなってると思います。

鈴木 ああ、そうですか。

(無言)

鈴木 で、前、あの、おっしゃってた療育指導室の、あの一、トップの人が、相談支援専門員だったというお話、ありましたよね。あのときって、あのときっていうか、その、あの一、野瀬さんは、その、退院したいっていうことを主治医にも伝えてますし、その一、相談支援専門員のモニタリングのときにも伝えてたわけですもんね。

野瀬 そうですね。

鈴木 ということは、相談支援専門員の方は、あの一、退院の意思があるってことを知っていて、で、それをあの、主治医の人には言っていた。

野瀬 恐らく言ってたと思うんですけど。

鈴木 ああ。でもそれはなかなかこう、実現されなかったっていうのはなん、何でなんですかね。

野瀬 うーん。やっぱ主治医が、その、乗り気ではなかったというか。

鈴木 ああ、はいはいはい。

野瀬 だって、病院全体が、リスクリスクでっていう時代やったんで。

鈴木 うんうんうんうん。

野瀬 外出とかも禁止にされてたから。

鈴木 うん。

野瀬 多分、病院を出るなんてとんでもないっていう考えやったんかもしれないですけど。

鈴木 うーん。

野瀬 ただ、ま、自分らが責任を取りたくないやと思います。

鈴木 うーん。

野瀬 なんか起こったときに。

鈴木 なるほどね。このリスクリスクっていう言葉って、結構、聞くんですか、やっぱり。

野瀬 そうですね。

鈴木 何かとリスクって言葉なんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。それはあの、主治医だけじゃなくて、看護師とかもですか。

野瀬 看護師とか、どっちかっていうと、まあ、医者のことを聞かなきゃあかんし、叱られるから、そう言わざるを得ないところもあると思うんですけど。

鈴木 うーん。

野瀬 何というか、伝染したような感じというか。

鈴木 うん。

野瀬 中でも協力的な看護師もいたんですけど。また、先生の言うことは絶対にはなるから。

鈴木 うーん。あの一、相談支援専門員って、ソーシャルワーカーだと思うんですけど、なんかやっぱり、立場的に下、下なんですかね。

野瀬 あ、病院の中で。

鈴木 うん。

野瀬 だと、彼らは全然、下になる。

鈴木 あ、全然、下になる。ということは、じゃあそこでなんか、モニタリングというか、要するに、計画を立てても、医師がこう覆しちゃうというか、そんな感じなんですか。うーん。

(無言)

鈴木 じゃ、あんまり、こう、相談支援専門員の人が手助けになったっていう感覚はないですか。

野瀬 あー、そんなにないです。

鈴木 ああ。

野瀬 退院の、まあ、直前とか、いろいろなことをやってくれはって。

鈴木 ふーん。療育指導室の他の、えっと、指導員の人も、そんなにですか。なんか、一応、福祉の人なんですけど、あまりこう、積極的に、退院に向けて。

野瀬 うーん。「退院したい」って言ってたときは、そうでもなかったです。

鈴木 あー。それはでも、あれですよ、クリスマスシンポの後ですよ。

野瀬 の前は、いや、ま、退院したいというのは僕、元気なとき言ってたんであれですけど。そのときは、手伝ってあげよう、みたいな雰囲気は全然なかったです。

鈴木 ふーん、あ、そんなときはなかった。じゃ、一応、でもモニタリングには話は聞く、聞いてくれるけど、なんかこう、積極的な感じではなかったっていうこと。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。

(無言)

鈴木 うーん、なるほどね。で、あの一、えっと、その、19歳のときにそういう意志を持って、えっと、その後、あの一、えっと、JCILの人たちが2017年の12月に来られますよね。そうすると、19歳のときって、野瀬さ、えっと、これ、2000、えっと、な、15、2015とかですかね、年としては。

野瀬 16。15か。16かな。

鈴木 15か16ですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 で、あの一、何だろう、その、やっぱりそう、JCILの人たちが来たことで、退院の意志っての、もっと強く持てるようになったんですか。それとも、こ、来られなかったとしても。

野瀬 ま、来なくても多分、退院したいっていう気持ちは持ち続けてたと。

鈴木 ああ、持ち続けてた。で、持ち続けていたけれども、ぐ、何ていうんですかね、具体的なそういう。

野瀬 何を、何から動けばいいかも、僕自身も分かってなかったし、お父さんも分かってなかったし。まあ、その、JCILの存在を、僕も全然、知らなかったの。

鈴木 うん。

(無言)

野瀬 ちょうどそのとき、大藪君がアメリカにダスキンのやつで研修にいった、帰ってきてどうしようって言ってたところに、ま、JCILに一回、顔を出してみたらっていうふうに言われたみたいで。顔、出さはって、そこで僕のことを相談してくれたので。で、ま、そこから(#####@00:11:05)、藤田さんとか植田さんとかもいたから、JCILが宇多野の支援に入れるようになって。

鈴木 うん。

野瀬 (#####@00:11:17)ってとこで、JCIL の存在を知ったような感じです。

鈴木 なるほどね。その前から、あの、大藪さんとは、連絡は取ってた、でしたっけ。あの。

野瀬 そうですね。

鈴木 ですよ。

野瀬 小学校からの付き合いで。

鈴木 ですよ。で、えっと、19歳のときに、あの一、大藪さんのボランティアサークルに入られて、出かけてらっしゃって。そのときから、そのときも、連絡取ってらっしゃいますね。じゃ、大藪さんがアメリカ行ったって、2016とかそんなもんでことですか。

野瀬 16か。いや、17。いや16か。

鈴木 あ、そんな。

野瀬 16か17。

鈴木 あ、はあ、はあ。

野瀬 いや、16ですね。

鈴木 ふーん。なるほどね。で、あの一、もう一つ、あの、19歳のときに、あの、市立病院に、あの一、泌尿器系で行かれていますよね。

野瀬 ええ。

鈴木 で、そのときって、どういうところが、あの、よかったですか。市立病院って。何が違いました？

野瀬 1~2週間、入院したんですけど、やっぱ、ナースコールとか押してもすぐ来てくれるんですよ。何か、接し方も丁寧やし。宇多野やってたの、10年、20年一緒にいるスタッフやからそりゃ、そう、なんか、なれなれしくなってくるのも分かるんですけど。あれ、

あんま、対応が全然違う感じです。

鈴木 あー。つまり、ナースコール押しても。前、おっしゃってたのが、あの、宇多野の場合は平均10分かかっておっしゃってましたけど。あの、市立病院はもう。

野瀬 もっと。1、2分で。

鈴木 あ、そんなに。看護師の数とかも、多かったですか。

野瀬 そうね。一般病棟やから、自分で歩ける人も多いし。

鈴木 ああ。

野瀬 (#####@00:13:36)。

鈴木 ああ、なるほどね。あ、そうか。自分でできる方も中には。

野瀬 (#####@00:13:43)できる方やから、多分。

鈴木 なるほどね。

野瀬 手は空いている(#####@00:13:49)。

鈴木 ふんふんふん。

野瀬 手、かかる人ばかりではない。

鈴木 ああ。ちなみに、その市立病院って、今でも関わってらっしゃいますか。

野瀬 今は、たまに。

鈴木 あ、たまに。泌尿器系ってということで。

野瀬 いや、ま、別の病気で。

鈴木 あ、別の病気で。

野瀬 こっちの耳がちょっと悪かったので、受診行って。

鈴木 え。何が悪い。

野瀬 耳が。聞こえにくかったんです。

鈴木 あ、耳ですか。その市立病院なんですか。

野瀬 ええ。

鈴木 そちらの。ふーん。また、あの、病院の中のサークル活動や、いくつかやってらっしゃったと思うんですけど、あれってあの、療養介護ですか。自立支援法の。

野瀬 多分、そうだと。

鈴木 ああ、なるほどね。

(無言)

鈴木 で、あのー、恐らくあのー、まあ、おっしゃってた、あのー、あのー、食事制限されてたって、あの、あれじゃないですか。多分、じえ、えっと、シンポの後でしたっけ。あれって、クリスマスシンポの後。

野瀬 いや、制限はもう。

鈴木 前からですか。

野瀬 シンポの前から。

鈴木 あ、前からですか。じゃあやっぱり、あれですかね。えっと、大藪さんたちが来られる、2017年の夏ぐらいからってことなんですかね。

野瀬 うん。これ、2017年の夏。

鈴木 で、12月に大藪さんたちが来られる。

野瀬 あ、いや、もう。

鈴木 もっと前？

野瀬 来たときはまだ、食べてたはずなんで。

鈴木 あ、そのときは食べれた。

野瀬 ええ。

鈴木 ということは、その後ですね。じゃあ、何。

野瀬 18年の。

鈴木 なるほど。

野瀬 夏とか。

鈴木 うん、2018年の夏ですか。あ。で、それから大体、1年ちょっとぐらいたって、退院されますもんね。

野瀬 そうですね。

鈴木 あのー、最初に、2017年の12月に、大藪さんと岡山さんと小泉さんと段原さんが訪問されてると思うんですけど、そのときってどう思われました？ 来られた、来られた日のことって覚えていらっしゃいますか。

野瀬 うーん。あんま、覚えてないですけど。まあ、もともと、僕と大藪君が友達っていうか、何ていうか。大藪君が知り合い連れてきたな、ぐらいにしか思ってなかったです。

鈴木 そのときに初めてあれですか、CILの説明受けたんですか。

野瀬 説明は、CILが(****ナンコモ@00:16:59)してたっていうのは、僕は、去年ぐらいの話なんで。ま、JCの説明を受けた感じですかね。

鈴木 あー、なるほど。そのときって、どう思いましたか。初めて説明を受けたとき。

野瀬 うーん。素直に、ありがたいなって。

鈴木 ああ。

(無言)

鈴木 あの、19歳のときに、既に自立生活されてるお友達、み、見てらっしゃいますよね。

野瀬 ええ。

鈴木 そのときは、もう、CILのことは知らなかった。

野瀬 知らなかった。

鈴木 ああ。で、まあ、こんなふうにできるのか、みたいな。

野瀬 ええ。

鈴木 ああ。で、えっと、2017年に皆さん来られたときに、初めてこう、あ、こういう組織があるのかっていう。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。その後、あれですよね、まい、毎月1回、訪問されるようになるんですよね、皆さん。

野瀬 そうですね。

鈴木 時間としては、大体、どのくらいあれなんですか。野瀬さんに関わってらっしゃったんですか。

野瀬 うーん。2、3時間ぐらいですかね。

鈴木 2、3時間。それはあの、病棟の中でお話しされる。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、病室ですか。病室。

野瀬 病室。

鈴木 うん。あの、どんなお話をされてたんですか。そのときって。

野瀬 日常の困りごとを聞いてもらったりとか、退院に向けてどう進んでいったらいいかを、相談、聞いてもらって。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 といっても、ほぼ大藪君としゃべってたりで。

鈴木 ああ。

野瀬 ま、世間話も入ったりはして。

鈴木 ああ、はいはいはい。世間話って、あれですか、もう。もう、何気ない。エへへ。

野瀬 そうですね。

鈴木 そのときのおき、お気持ちって、どん、どん、どんな気持ちっていうか、どんな感じだったんですか。

野瀬 うん。病院、なかなかそういう面会が。僕も、週一で家族に会うぐらいやったので。そういうイベントごとがあるのは気分転換になってよかったですけど。

鈴木 ああ。

野瀬 ただ、病院の人の目があるから、話しにくかったりはしますけど。

鈴木 あー。それは、えっと、誰の目ですか。

野瀬 ナースであったり、医者であったり。

鈴木 あと、患者さんとかですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 あの一、4人部屋だったと思うんですけど、他の3人の方がいらっしゃるわけですよね。そのときの他の患者さんの反応ってのはどんな感じだったんですか。

野瀬 いや、特に、普通に過ごしてる感じしてた。

鈴木 あ、そうですか。なんか後で、あの人たち誰、みたいなの。そういう話は。

野瀬 は、特になかったです。

鈴木 ああ、そうですか。普段からあんまり、あれですか、話したりとかされないんですか。ま、同室の人。

野瀬 えーっと。(###@00:20:59)、大藪君たちが来てから、1回、部屋が替わってて。その前は割と声が出る人らばかりだったのでしゃべってたりはしたんですけど、その次の部屋はこう、僕の友達やったんですけど、声が出ない2人やったんで、しゃべることはそんなになくて。

鈴木 ああ。

野瀬 ま、LINEでやりとりとかはあったんですけど。同じ部屋やのに。

鈴木 うん、そうですか、あー、なるほどね。じゃ、どん、どんな、えっと、な、特に関心は、じゃ、持ってないような感じでしたか。3人のかたがたは。

野瀬 多分。

鈴木 ああ、そうですか。じゃ、特にそういう話はなかったってことですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 他の病室の方もあれですか。特に何か、後で聞かれたとか、そういうことありましたか。

野瀬 は、なかったです。

鈴木 あの、大体、あの、月一で来てて、その後、途中から1週間に1回に変わってるような感じですか。それとも基本、月一ですか、皆さん。

野瀬 基本、月一で。

鈴木 はあ、はあ。

野瀬 そうですね。大藪君とは友達なんで、一緒に遊びにいったりとかも、プライベートで彼が来てたりはあったような気がしますけど。

鈴木 あ、なるほどね。プライベートで来られたときも、病室で、一応、お話しと。

野瀬 (#####@00:23:03)。

(無言)

鈴木 ご自身にとってあれですか、1カ月に1回ぐらいの時間ってのは、必要な時間だったと思いますか。それと、もうちょっと来てほしかったとか、ありますか。

野瀬 もっと話せたら、退院が早かったのかなとは思いますが。

鈴木 あー。もっと話せたらってのは、その、例えば1週間に1回とかですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。月一だと、あれですか、なんか、やっぱ物足りなさというか。

野瀬 いや、まあ、1回2、3時間しゃべっただけで、そんな物足りなささは、そのときはないですけど。

鈴木 ああ。

野瀬 病院内のその、いろんな処置とか、時間もあって。お風呂の時間も決まってるし。

鈴木 はい。

野瀬 ま、看護婦さんたちとかから、早く終わらないかな、みたいな目で見られてるのが分かるから、すごく話しづらいというか。そっちも気にしながら話を集中しなあかんから、なかなか難しい。

鈴木 うん。その一、まあ、あの、世間話もあ、あると思いますけど、それ以外にもやっぱり、なんか重要なこととかってということも話されるっていう意味で、もっと話したかったってことなんですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 具体的にどう、どういうあれなんですか。気持ちのありようとかそういうことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 例えば、どういうふうに、誰に何を伝えるかとか、そういうことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。それだけ、あの一、要するに退院っていうのはやっぱり、いろんなことを考えなければいけないってということなんですか。

野瀬 うーん。そうですね。僕自身が初めてなんで。どういう調整がいるのかとかもよく分かってないし。医療的ケアが、どれだけヘルパーがやってくれるのかとかいう不安も、当時はあったから。ずっと。どこまでのこと、外で、地域でもできんのかなっていうふうには考えてました。

鈴木 なるほど。そういうことはまあ、もうちょっと、こう、訪問回数的には、1週間1回ぐらいで。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、まあ、ある程度こう、プライベートに話せる空間が必要なんじゃないかっていうことですかね。

野瀬 そうそう。

鈴木 もしあの一、これからその、えっと、退院支援を、野瀬さんがこれからね、大藪さんに代わってやられるときに、やっぱりそういう、ま、人によるかもしれませんが、ま、1週間にやっぱり、1回ぐらい、訪問が必要かなって思われますか。

野瀬 うーん、そうですね。ま、必要。まず、相手が必要とされたら、なるべくこう、時間を割けるようにはしたいです。

鈴木 あと、LINE で結構、お電話ね、大藪さんとされていたと思うんですが、それもあれですか、もう、いろ、いろんなことというか。

野瀬 いろんな、まあ、最後のほうっていうか、僕が肺炎を起こした後に、ご飯が食べれなくなったときに、僕の気持ちがかかなり沈んでしまって。ま、大藪君に何回か相談に乗ってもらったりして。で、まあ、そこからのシンポにつながるわけなんですけど。

鈴木 やっぱり、そういう何か、相談に乗っていただいたっていうことで、やっぱりすごく自分にとってじゅ、重要だったっていう。

野瀬 そうですね。

鈴木 あの一、あの、何ていうんですかね、大藪さんって、あれですよ、もう本当に野瀬さんにとってもう、昔から知っている大切なお友達で。やっぱりそういう方が相談に乗ってくれるってのは、やっぱ、おっきいですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 もし、これ、仮に、何ていうんですか、一般的にはその、なんかいわゆる健常者っていうか、そういった人たちがサポートっていうか支援をするんですけど、やっぱりそれと比べて、当事者の方、しかもお友達って、なかなかない状況だと思うんですけど。

野瀬 そうですね。

鈴木 そ、それ、どう思われます？ 今から振り返ると。

野瀬 友達の仲では一番近くで知ってくれてるし、状態もよく分かってるから、向こうも支援、しやすいやろうし、僕も安心できるしって感じですね。

鈴木 お友達だからかえって言いづらいってということもないですか。

野瀬 それは特に。

鈴木 友達だからこそ言えることのほうが多かったってということですかね。

野瀬 そうですね。

(無言)

鈴木 あと、あの一、あの、なんか、病棟内で、重訪を使用できるかどうかって交渉されますよね。あの、病院。

野瀬 あ、ええ。

鈴木 あれって、いつ頃、病棟内でじゅう、重訪使えるって知ることになったんですか。

野瀬 うーん。いつやったかな。19 ぐらいのときに。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 今(#####@00:30:07)友達の、まあ、一回友達の家に遊びにいったりして、退院したくなったっていう友達が、ある日、なんか重訪の、院内への、病院からの外出でも使えるようになったよって教えてくれたのがきっかけです。

鈴木 うん。じゃあ、あの、19 歳のとき。

野瀬 そう。

鈴木 あ、その、先輩の家に行ったときに教えていただいてってことですか。で、それはあれですよ。あの一、えっと、ということは、19 歳のときということは、えっと、大藪さん

たちが、もう、来る前から知って。で、もう、ご自身であれですか。病院が使えるのかどうかってことを病院に尋ねたんですか。

野瀬 療育指導室の方に言って、使えるように、そのことをお父さんからは交渉したけど、結局、何の進展もなく。

鈴木 ふーん。その療育指導室の、いわゆる相談支援専門員さんに。

野瀬 そうです。

鈴木 そのとき、相談支援専門員さんは何と言ってましたか。使いたいんだけどっていうことで。

野瀬 うーん。ヘルパーとかに、吸引とかを教える体制じゃないから、教えてもらえるように。院内にも訪問看護があったんですけど、訪問看護に聞いてみますねとは言ってあって。後から音沙汰なかったから。

鈴木 音沙汰がない。うん。じゃあ、あの、お尋ねになったのは、基本、療育指導室だけですか。それとも他にもお尋ねになりましたか。

野瀬 いや、だけですわね。

鈴木 だけですわ。例えば、主治医にそういうことっていつ、言ってもあれですかね。動かなかったってことですかね。

野瀬 聞いたことないので分からないですけど。

鈴木 でも、担当が違うっていう判断で聞かなかったっていうか。

野瀬 うーん、多分。

鈴木 うーん。で、もしかしたら、主治医がそこで止めてたんじゃないかってのはあります？

野瀬 ま、その可能性もあります。

鈴木 うーん。

(無言)

鈴木 あと、あの、19歳のときに、あの一、大藪さんの、あ、と、ごめんなさい、あの、お友達訪問されたときって、一緒に、なんか、あの一、出かけられた、お友達いらっしゃいましたよね、あの。

野瀬 ええ。

鈴木 それはあの、同じ筋ジス病棟の方でってお話しされてましたね。その方ってあれですか、まだ病院の中にいらっしゃるんですか。

野瀬 まだ病院です。

鈴木 ああ、そうですか。あの、野瀬さんがこういう形で出られたってということについて、その、その方は何かおっしゃってましたか。

野瀬 いや、特にない。

鈴木 ああ、そうですか。じゃ、その人は特に、じゃ、あれですか。その、何ていうんですかね、その、お友達の(###@00:34:27)生活見ても、特に何か自分もってことにはならなかった。

野瀬 ではないと思う。

鈴木 ああ。

野瀬 ちょっと、こないだ何か、地域移行のチームから、他、地域移行したい人いない、したい人いないか調査してくれ、みたいなあれがあったんで。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 その、僕と大藪君の友達にも、僕と大藪君とが世間話交えながらしれっと聞いてみたんですけど、何かもう、話をすぐそらすような感じなんで、多分、本人はしたくないかな。

鈴木 あー、もう、ちょく、本人には会ってるんですか。

野瀬 いや、Zoom でしゃべって。

鈴木 あー。

(無言)

鈴木 じゃ、時間を決めて、その Zoom で話そう、みたいな感じになって。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。じゃ、それ以外に、他にはいらっしやらないんですか。そういう、なんか、可能性のある人って。

野瀬 将来的には出たいかなって言う人が、今、1人おられるのはおられるんですけど、宇多野に。

鈴木 あ、そうですか。へー。

野瀬 ただ、今、JCIL が関わってなくて。メインストリームっていうところが関わってくださっていて。本当は、地域移行するってなったら、多分、JCIL が(#####@00:36:07)、引き継ぐとは思うんですけど。

鈴木 え、どうしてその方、メインストリームの関わりがあるんですか。

野瀬 その、その担当のケースワーカーさんが、メインストリームのほうに相談しはったかなんかで。

鈴木 担当のケースワーカーがメインストリームさんに紹介されたんですね。

野瀬 恐らく。

鈴木 そういうことは。

野瀬 たまたま、知り合いやったか何かやったと思うんですけど。

鈴木 あー。え、ごめんなさい、宇多野病院ですよ。

野瀬 は、多分、役所のワーカーさんやから。

鈴木 あ、役所のワーカー。なるほど。で、どうしてこの方、役所のケースワーカーと関わってるんですか。

野瀬 それは分からないですけど。

鈴木 野瀬さんは、関わりはありましたか。役所のケースワーカー。

野瀬 いや。退院時にちらっと会ったぐらいで。

鈴木 ああ。この、役所のケースワーカーってなん、どこの部署の人ですか。

野瀬 障害福祉の。

鈴木 あ、障害福祉ですか。うーん。あんまりでも、あれですよ。宇多野病院の患者さんで、自治体の障害福祉課のケースワーカーと関わってる人なんて、ほとんどいないですよ。

野瀬 うーん。あれ、何らかの形では、みんな関わってると思うんですけど。

鈴木 ああ、そうですか。でも、野瀬さんは関わりは、退院のときしかなかったっていう。

(無言)

野瀬 たまに、障害覆面調査とかで、病院に来てはったりはしましたけど。

鈴木 あー、その関係ですか、なるほど。はいはい。あ、その関係ですね。なるほどね。

(無言)

鈴木 あと、あの、大藪さんたちと電話されるときって、もう、いつでも基本的に電話できるような状況でしたか。病院の中で。

野瀬 僕はできました。

鈴木 あ、できました？ でも、まあ、あの、お部屋で話さなきゃいけないという状況ですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。セッティングするときってというのは、やっぱり、頼むわけですよ、看護師さんに。

野瀬 ええ。

鈴木 はい。で、あのー、えっと、2017年の12月に訪問されて、その後って、あのー、要するに、重訪を使えるようにとかっていうことの交渉とかもされているわけですよ。そのときからも。でも、そのときは、まだ、その、退院に向けて動いてくれるっていう感じではなかったんですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。あの、JCILの皆さんが来られた時期って、周りの看護師さんとか、何か言っていました？ 他のスタッフの人の方は。

野瀬 うーん。いや、特に何も言ってなかった。

鈴木 あ、特に何も言ってない。興味を持って、なんかこう、聞いてくるひ、人もいなかった。

野瀬 そうですね。

鈴木 あの、相談支援専門員さんもですかね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。ただ、2018年、シンポジウムがあって、その後に動きが始まったって野瀬さん、おっしゃってたと思うんですけど、具体的にど、どんな感じで動いてるなっていう感じだったんですか。

野瀬 うーん。シンポが、ま、クリスマスにあったんですけど。

鈴木 はい。

野瀬 で、ま、年明けぐらいに、病棟の師長と、僕の主治医と、療育指導室のトップの人が僕のところに来て、本当に退院されたいという希望をお持ちなんですかっていう意思確認みたいな、しに来はったときに、僕が退院したいですっていうふうに伝えたら、じゃ、準備を進めましょうっていうふうに言わはって。そこから、ま、急激に動いた感じですね。

鈴木 うーん。年明けというと、もう、えーっと、1月の上旬とか、お正月明けっていう。でも、もう本当、すぐになって感じですね。で、具体的に動き始めたっていうのは、ど、何をしてくださったんですか。

野瀬 ま、実際動き出したのは、多分、JCILなんですけど、JCILに僕が、こういうことがありましたって言ったら、いうのを伝えて、じゃ、一緒に準備しましょうかってなって。そこから、家、探したりとかが始まった感じですね。

鈴木 家探し、家探しってのはいつ頃、始められました？

野瀬 家探しは、5月とかじゃないですかね。あんま早く決めても、仕方がないんで。

鈴木 ああ。2019年の5月。

野瀬 とか、4月とか。

鈴木 ああ4月、5月。どんなふうを探されたんですか。家は。

野瀬 僕は直接は関与してないんですけど、そのときは、相談員の人が不動産屋に行って、こうこう、こういう条件で、みたいなのを言わはって、不動産からいくつか提示されたやつを実際に見にいらって。で、ま、僕にも状況を教えてもらってって感じですね。

鈴木 あ、じゃあ、家探しは相談支援専門員の方？ 宇多野病院のですか。

野瀬 いや、JCIL。

鈴木 ああ、JCIL ね。

野瀬 相談支援員、支援員じゃなくて、ただの相談し、いや、相談員。

鈴木 あ、相談員ですか。健常者の人ですか。

野瀬 ええ。

鈴木 野瀬さんも、大体、この辺りが住みたいとかっていうご希望を出されてってことですか。

野瀬 うーん、お父さんの希望が。なるべく家から近いところで。今の主治医がまあ、言わはったのが、ちょうど今の鞍馬口ぐらいまで言わはって。みな、そ、で、ま、で、いいって感じ。

鈴木 ふーん。今の主治医の方が、近くにいらっしゃるんですか。この辺りの。

野瀬 大將軍って、あの、北区のほうです。

鈴木 北区。

野瀬 に、りよ、療養所があって。

鈴木 ああ、療養所が。

野瀬 診療所があって。

鈴木 あ、はいはい。田中先生でしたっけ。

野瀬 そうですね。

(無言)

鈴木 えっと、家に近いってのは、お父さまのおうちに近いってことですか。

野瀬 はい、実家、はい。

鈴木 あ、実家。あ。

野瀬 お父さん(#####@00:45:24)、僕のうち。

鈴木 東山。

野瀬 いや、今はもう引っ越してて。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 丹波口で、ここの、丹波口っていう。

鈴木 丹波口。

野瀬 ところに住んでる。

鈴木 で、それで、えっと、JCILのスタッフの方がいろいろお探しになって。

野瀬 そうですね。

鈴木 それ、結構、すんなりと不動産の人たちも理解してくださったような。

野瀬 恐らく。

鈴木 選択肢は三つでしたか。

野瀬 そうですね。三つぐらいあって。ただ、ま、1回目でここって決めたところが、契約前に、先に別の方が入ってしまっ。もっかい三つぐらい候補を出してもらって、ここを選んだ感じです。

鈴木 ああ、そうですか。条件はどんなふうにあれですか、探されたんですか。

野瀬 条件は、ま、もちろん車いす OK で。あとは、生活保護の受給者が OK かどうかってこと。あとは、ま、仕事にいくんで、駅近でっていう感じです。

(無言)

鈴木 なるほどね。あのー、選択肢提示されるときって、あの、ど、どんなふうに。なんか、写真とかですか。

野瀬 うーん。そう。ま、よく、あの、最初にサイトに載ってる物件情報みたいなのが印刷されて。それを見せられてって感じ。

鈴木 できれば、あれですか、できればというか、その、実際にご覧になりましたか。

野瀬 あ、ここ、ここだけは内覧に(###@00:47:42)。

鈴木 あ、ここ、内覧。

野瀬 はい。

鈴木 じゃ、内覧に行くことはできたってということですかね。

野瀬 そうですね。

鈴木 えっとー、それはじゃあ、病院の、えっと、主治医も許可してしてくださったと。

野瀬 まあ、しゃあなしにみたいな感じ。

鈴木 しゃあなし。そんなに、え、しゃあなしってことは、じゃあそんなに。

野瀬 乗り気ではなかった。

鈴木 あ、乗り気ではなかった。えっとー、そのときって、ごめんなさい、えっと、内覧にくるってことは、宇多野病院からここにくるわけですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 うん、で、どういうふうにしてここに来られたんですか。

野瀬 は、JCIL のヘルパーと。あとは、ま、入る予定やった事業所のヘルパーとっていう

感じですね。

鈴木 お車か何かで。

野瀬 あ、JCIL の車で。

鈴木 ああ、はあ。そのヘルパーさんたちってというのは、えっと、野瀬さんの3号研修はやってらっしゃりました？ そのとき。

野瀬 受けてない。

鈴木 受けてない。どんなふうにしたら、あれですか。その、主治医は許可したんですか。

野瀬 うん、まあ、それもなんか、自己責任で、みたいな形で。まあ、JCIL と、違法性阻却って言って、違法性の阻却では、何かあった場合には吸引とか、あの、してもいいですよっていうのを書面で交わしてって感じですよ。

鈴木 え、ごめんなさい。何ていう名前ですか。違法？

野瀬 違法性阻却。

鈴木 阻却。

野瀬 ていう制度が。制度。

鈴木 えっとそれ、違法性って、ごめんなさい、異なる法律のイホウですか。

野瀬 そう、いや、違法ですね。

鈴木 ま、そのこと自体、違法だからという。

野瀬 そうです。

鈴木 で、何かあったら、JCIL が責任を取るって言う、そういう文書(#####@00:50:02)。

野瀬 そう。JCIL が責任取ってとか、なんかあった場合には吸引しても(#####@

00:50:14)、大丈夫ですよみたいな書面を僕が一筆書いて。

鈴木 で、実際、時間的にはどのぐらいの時間で。

野瀬 うん、2時間。1時間。2時間ぐらいですかね。

鈴木 た、実際、吸引されたんですか。

野瀬 いや、してないですね。

鈴木 野瀬さんのお気持ちとしては、そういうふうに出るってことについて、どう思われますか。

野瀬 うーん。やっぱり研修はしてほしかったと思います。そういう研修するってことは別に、誰でもできるわけではないってことやから。なので、個人個人の、やっぱり、やり方とかがあるから、そういうのをちゃんとヘルパーに身に付けさせてから外出したかったなと思いますけどね。

(無言)

鈴木 で、えっと、見たのがこの住宅だけでしたか。

野瀬 ええ。

鈴木 他は見てないんですか。

野瀬 他は見てないです。

鈴木 じゃあもう、最初から、えっと、3択でも、ここがいいなっていうことで。他を見てなかったっていうのは、それはまあ、もう、もうここがすごくいいと思ったのか。それとも、他も行きたかったけどっての。

野瀬 外出許可が下りる、下りなそうやったり。あとは、まあ、また、そういうふうに取りられても困るなと思って。

鈴木 またされ。

野瀬 別の、別のお客さんに。

鈴木 ああ。

野瀬 この家を取られる可能性。

鈴木 なるほど。

野瀬 なきにしもあらずなので。

(無言)

鈴木 その外出許可が得られるまで、時間、かかりました？

野瀬 うーん。そうですね。ひと悶着、ふた悶着あって。

鈴木 ひと悶着。うーん。それで、結果的にもしかしたら、もう一つ取られたっていうのあります？ 理由として。

野瀬 あるかもしれない。

鈴木 うーん。それは、本当はもう一つの行きたかったっていうか、希望、あったわけですよ。

野瀬 ま、だ、どの候補も全部見て、決めたほうが、もしかしたら、残り二つのほうがよかったっていう可能性もないことはないと思って。

鈴木 うーん。でも、外出許可が下りない可能性もあって、もうここに決めちゃったってことなんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 1日で、やっぱり、2、3個いくってのはきついでもんね。

野瀬 時間制限があったり。

鈴木 時間制限。

野瀬 外出時間が。

鈴木 え、どの。

野瀬 病院からいわれてるのが、多分、2時間までかなんかやったので。

鈴木 時間制限があんですか。それは病院が決めてるんですか。

野瀬 いや、その主治医が。病院全体では、そんな、しょう、消灯までに帰ってくださいと、(#####@00:54:14)なんですけど、僕には、主治医が2時間までっていう。2時間とか、3時間とか。

鈴木 うーん。そうすると、やっぱり1カ所しかいれない。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。

(無言)

鈴木 じゃ、野瀬さんとしては、一番いいやり方ってのは、どんな感じだったんですか。1回、1回にこう、2、3回周って、時間、たっぷりって見る形なのか。それとも一回一回、別々で、で、もう、外出許可、早めに下りてほしかったのか。

野瀬 1回で全部見れたほうが、楽ではありますけど。

鈴木 うーん。じゃあ時間数の制限はやめて。

野瀬 そう。

鈴木 うーん。で、その後、あの一、外泊のお願いされてますけど、それは、もう、認められなかった。

野瀬 そう。もっと粘れば良かったかもしれないですけど、まあ、退院前やったんで。

鈴木 うん。

野瀬 これ以上、関係、悪化しても、なんか、退院のときも嫌やしなど。

鈴木 うん、うん。あの、退院の日って、えっと、2019年の7月ですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 その7月って、どうして7月にされたんですか。

野瀬 うん、当初は6月の目標やったんですけど、それ、家、決めたりなんやかんや、訪問看護の調整やったり、訪問(****ニューカン@00:56:08)調整してたら、6月末になって。サービスとかの切り替えを、月末で切ったほうが、あとの手続きが楽やったので、いうようなことで、7月1日に退院したと。

鈴木 なるほど。じゃ、その、それほど、じゃ、大幅に遅れることなく。

野瀬 そうですね。

鈴木 いったっていいことですね。うーん。で、まあ、再三、外泊させてほしいってお願いして、でもなんか、なんですかね、脅迫文みたいなものを、文書、2回に渡ってもらったって。

野瀬 そうそう。

鈴木 その、脅迫文みたいってのは、なんかやっぱ、それだけきつい言葉だったんですか。

野瀬 うん。そう、うん。

鈴木 どんな、あれです。何が書かれてたんですか、そこに。

野瀬 さっきから言ってるけど、あのなんか、そこにもやっぱ、リスクのことが書いてあって。あなたはあの、骨がもろいので、骨折のリスクはありますみたいなとか。まあ、管類が僕、管類が結構、入ってるんで、それが抜けてしまっても知りませんよ、みたいなことが書

いてあったり。それらを全て理解した上で、外出されるなら許可しますみたいな感じ。最初はそれにサイン書いて渡して、外出してって感じです。

鈴木 うん。うん。

野瀬 その文書にも耐えられなかったから、外泊やめったっていうのがあるんですけど。

鈴木 うん。やっぱ、それだけ、何ていうのかな、気持ちをこう。うん。

野瀬 そうですね。メンタルをえぐられました。

鈴木 そんなにあれですか、やっぱ。うーん。それはやっぱ、言葉遣いがすごくきつかったんですかね。内容的にも、言葉遣いのにも。

野瀬 言葉遣いは、ま、でもいいんだなって感じの文章のようですけど。

鈴木 うーん、ああ。

野瀬 内容は、病院が正しくて、こっちが悪いみたいな、なんか、書き方やったから。

鈴木 ああ、そうですか。責められてるような、そんな感じ。

野瀬 そうです。

鈴木 うーん。で、前、なんか野瀬さん、あの、座談会で、なんかもう、本当にきついから、もう、何とかして出てやる、みたいな、そういう気持ちも逆に、も、持ったっていうか。でも、脅迫文については、もうそういう気持ちすら持てないぐらい。

野瀬 いや、もう、逆に、どうにかしてでも出てやろうと思ったんですけど。

鈴木 ああ、そうですか。うーん。

(無言)

鈴木 そういったときって、あの、なんですかね、病院の中に相談できる人って、他にいないんですか、その、そういうふうに主治医が言ってきたことに対して。

野瀬 うーん。

鈴木 その気持ちを。

野瀬 病院の中にはいないですね。

鈴木 いないんですか。まあ、あの一、な、仲のいい看護師さんがいらっしゃるって話されてましたけど、そういう看護師さんでもお話しはできないですか。

野瀬 やっぱ、看護師なんで。医者の方の指示のもと動いてるんで。（****ワンチャン@01:01:04）、パソコンとかに記録されたら、主治医が見るんで言えなかったです。

鈴木 なるほどね。で、もちろん療育指導室の相談支援専門員にも言えない。

野瀬 そうですね。

鈴木 いや、そのときって、苦情解決窓口ってできてますよね。

野瀬 そうですね。

鈴木 そこには。

野瀬 入れようとは思わなかったです。

鈴木 入れようとは思わない。うーん。

野瀬 それ、院長と話したときも、院長も結局、ま、食事についてですけど、到底、あんたが食べれるような体じゃないって言われたときに、もうこのびょう、病院じゃ何言っても無理やなと思った。

鈴木 うーん。

(無言)

鈴木 他に、いや、これ、もし、JCIL が関わってなかったら、他に相談できる場所って、外

にあるんですかね。

野瀬 うーん、外にどうなんだろう。何らかの方法で、役所に言えたら、何かしてもらえるかもしれないですけど。

鈴木 うーん。

野瀬 JCの人がそう言ってるんですけど。

鈴木 うん。

野瀬 ま、大抵、JCの人が、出たらセルフプランにしろっていうふうに勧められて。ていうのは、なんかその、相談員によって、全く動かなかったり、話、聞いてくれなかつたりする人もいるみたいで。ま、そんなやったらセルフプラン、自分たちでプランをつく、つくって、役所に提出したほうが自分らのやりやすいようにできるみたいなことをいってあったから。

鈴木 うんうんうん。そのセルフプランって、いつ頃、つくり始めたんですか。

野瀬 うーん。僕は、退院の半年。

鈴木 ああそうですか。

野瀬 いや、3カ月前ぐらいから、大藪君に手伝ってもらいながら。あと、もう1人、健常者の相談員に手伝ってもらいながらつくった感じです。

鈴木 あ、そうですか。どんな内容を書かれたんですか、セルフプランに。

野瀬 セルフプラン。安心して地域で自立生活を送りたいとか。それは結構、あの、重度訪問も下りるか下りないかに関わってくるので。うん。24時間、呼吸器を使用してるので。24時間、切れ目なくヘルパーからの支援を受けたいとか、安全に外出できるように、2人介助で外出する必要があるとかいうのを書き出して、国に提出した感じです。

鈴木 うーん。1週間の、なんか、スケジュールって書きましたか。

野瀬 うん。

鈴木 あの、時間っていうか、もう細かく。それは、大藪さんが病院に来られて、一緒に、さ、作成されたんですか。

野瀬 いや、もう電話とかしながらとか、彼がある程度つくったのを、こんなんでどうって見せてもらってとか、そういったやり取りして。

鈴木 うん。それって、今度、見せていただくことって可能ですか。

野瀬 あ、(#####@01:05:29)。

鈴木 あの、野瀬さん持ってらっしゃるんですか。

野瀬 あ、持ってます。

鈴木 あ、そうですか。ありがとうございます。で、えっと、ということは、ごめんなさい、あの、実際に作業されるのは、病院の中にいると、どなた、どなたか、やっぱり、手伝ってくれた状況ですか。

野瀬 いや、あの、僕、パソコン操作ができるので。

鈴木 あ、そうですか。じゃあもう、自分で。それについては、あの、切り替えるとき、なんか、相談支援専門員の人、何か言ってましたか。

野瀬 いや、特に何も言ってなかったですけど。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 (#####@01:06:15) ときの提出とかは、代わりに郵送してくださったり。

鈴木 ふーん。じゃあ、協力的に。

野瀬 そう。

(無言)

鈴木 で、あの、重訪、それをあれですか、その、手続きは、退院前にされるわけですよね。

野瀬 そうですね。

鈴木 それは、どんなふうにご手続きされたんですか。

野瀬 そのセルフプランを役所に出して、役所の人が審査会ってところに審査に出して、で、決定が下りる。

鈴木 提出されたのは、それは、野瀬さん、提出されにいったんですか。

野瀬 いや、郵送で。

鈴木 あ、郵送で。郵送してから、どれぐらいで下りました？

野瀬 どれぐらいやったか。

鈴木 すぐでしたか。

野瀬 いや、すぐではなかったかな。

鈴木 ふーん。

野瀬 仮決定っていうのは。

鈴木 はい。

野瀬 多分、2~3週で下りたのかな。か、まあ、1カ月かくらい。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 でも、本決定みたいなのは、結構、かかるみたいで。

鈴木 うん。

野瀬 どれぐらいかかったかは、うろ覚えですけど。

鈴木 うん。じゃあ、3カ月前にセルフプランつくって、すぐにもう郵送されて、1カ月ぐらいにはもう、仮決定みたいな。で、本決定が出て、退院。

野瀬 いや、本決定出る前に、多分、退院してる。

鈴木 あ、そうですか。そのとき、何時間下りたんですか。

野瀬 何時間下りたんやろ。仮決定は。今は788時間ですけど。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 仮決定のほうが多かった記憶はあるけど。

鈴木 ふーん。

野瀬 830とかって。

鈴木 ああ、そうですか。減ったんですか。

野瀬 恐らく。

鈴木 ふーん。

野瀬 審査会で修正が入って。

鈴木 ああ、そうですか。788時間っていうのは、ご自身で足りてる時間ですか。

野瀬 ま、今んとこ足りてます。

鈴木 ああ、そうですか。じゃ、一部で2人の部分を認めているっていう状況ですかね。回数ですか。

野瀬 ま、ほぼ僕は使ってないんで。

鈴木 ふーん。

(無言)

鈴木 でも、あの、えっと、その重訪の、えっと病棟内で研修ってできなかったわけですね。

野瀬 ええ。

鈴木 それはやっぱり、ご自身、出る前に研修して出たかったって思いますか。

野瀬 そうですね。

鈴木 なんにも研修ってなかったんですか。

野瀬 うーん。いや、呼吸器の取り扱いと、車いすからベッドと、ベッドから車いすの乗せ方とかはあったんですけど、それ以外はあの、吸引とかは何もなかったです。

鈴木 ふーん。時間的にはどのぐらいの時間、やってくださったんですか。

野瀬 30分ぐらいです。

鈴木 えっと、野瀬さんの介助する予定の人に、そういう研修をされたわけですね。

野瀬 ええ。

鈴木 えっと、病院に集まったんですか。

野瀬 病院。

鈴木 何人ぐらいのヘルパーさんが。

野瀬 10人いかないぐらいですけど。

鈴木 で、1人の看護師さんからレクチャーを受けたってことですか。

野瀬 そうです。

鈴木 でも、野瀬さんとしては、やっぱり、それはちょっと、も、もうちょっとちゃんとやってほしかったのはあるってことですよ。

野瀬 いや、ま、移乗とか、多分、ヘルパーさんも慣れてるんやろうからよかったですけど、吸引とかを、やっぱ、してほしかったなと思うんですけど。

鈴木 うーん。つまり、3号研修、重訪の研修を。

野瀬 そうですね。

鈴木 その、いわゆるこう、(****ベッドトウベッド@01:11:22)っていうやり方について、どう思いますか。

野瀬 結構、危険やと、僕は。なんか、吸引がそんなにないんであれなんですけど。吸引が、やっぱり心配な人とかは、ちゃんと学んどいたほうが。誰でもできる行為ではないと思うから。

鈴木 つまり、あの一、何ていうんですかね、その、外泊って必要だったと思います？

野瀬 そうですね。もし、外泊できてたら、ここでは訪問看護で(####@01:12:06)、吸引の研修とかが先に受けれたり。病院に呼んでも来てくれるのは来てくれるみたいなんですけど。

鈴木 うん。でも、その病院の中で、例えば、あの、重訪の研修ができると。

野瀬 ええ。

鈴木 そのときに、病院の中と、要するに外泊って、自立支援体験室でやるのと、だいぶ違いますか。

野瀬 やっぱり、移乗とかも外泊中はしなあかんと思うんで。ベッドから車いすとか。ま、そういったものも先にできるから、その退院日にそんな、どうしよう、どうしようってならんで済むんじゃないかなと思うんですけど。

鈴木 なるほどね。やっぱり、病院の中でやるってのは、じゃあ、やっぱり限界があるって

いうか。

野瀬 限界がありますね。

鈴木 うーん。じゃあ、一番ベストな形っていうのは、やっぱり、外泊して研修受けて出るという形。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。野瀬さんの場合は、外泊はどのぐらいしたほうがよかったとかありますか。もし、できるとしたら。

野瀬 できるなら、僕の入ってるヘルパーたちが全員入れるだけの日数があつたらよかったと思うんですけど。

鈴木 なるほど、なるほど。一週間とかですね。

野瀬 多分。1回に1週間じゃなくても、こまめにでも。

鈴木 あと、あの一、家具とかって、Amazonで頼んでらっしゃいますよね。

野瀬 ええ。

鈴木 これって、ど、どうだったですか。その、本当は自分で見たかったとか。

野瀬 そうですね。やっぱ、見て選んだほうが、サイズ感も分かるし。

鈴木 うん。買ってきて、どうでした？

野瀬 うーん。まあ、失敗したのはそんなにはないんですけど。

鈴木 ああ、そうですか。でもやっぱり、見て買うのと、Amazonで注文するのとでやっぱ違いますかね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。

野瀬 画像の情報だけだと、サイズ書かれてても、サイズ感がよく分からへんから。

鈴木 ああ。あとはなんか、結構、楽しいですよ、なんかね。

野瀬 あ、そうですね。

鈴木 そういうなんか、家を、引っ越すときのなんか、楽しみみたいなのがなくなっちゃったのかなっていうのは感じましたけど。

野瀬 そうかもしれません。

鈴木 それも許可、下りなかったんですか。

野瀬 外出許可は下りなかったんで。外出許可が下りてたら、多分、選べたと思うんですけど。

鈴木 やっぱ変な話、内覧は、み、認めてらっしゃるわけですよ。でも、どうして他の外出は。

野瀬 ま、内覧もしぶしぶやったんで。

鈴木 あ、しぶしぶ。

野瀬 同意書書かされて。

鈴木 あー。1回だったら、もう、しょうがないかみたい。うーん、なるほどね。で、退院前のカンファレンス、1回だけだったんですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 なんか、公開処刑場って話だったんですけど、そんなにひどかったんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。どのぐらいの時間、行われたんですか。

野瀬 1時間ぐらいじゃないですかね。

鈴木 1時間。うーん。それは退院前の、何か月前とかだったんですか。

野瀬 1週間前。

鈴木 1週間前。え、なんかあれですよ、でも、それも少ないし、あまりにも直前過ぎますよね。

野瀬 そうですね。

鈴木 な、なぜ、カンファレンスが行われなかったんですか。

野瀬 うーん。なんで。

鈴木 やり、やりたいというか、その、それは希望としては出されてたんですか。

野瀬 いや、僕はもう、あんまし病院との仲が、もうあんまりよくなかったのと。

鈴木 あー。

野瀬 お互いにそんな、しゃべりたくなかったっていうのもあったんですけど。

鈴木 あー、なるほどね。でも、それもなんかつらいですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 でも、本来的には、やっぱ、何回かやったほうがいいかなと思いますけど。

野瀬 そうですね。

鈴木 なんかもう、結構、長いじゃないですか、宇多野病院って。それが、で、なんか、こういうふうにして、まあ、何ていうのかな、こう、去らなければいけないってのはどんな感じなのかなって思ったんですけど。

野瀬 うーん。ほんま、もっとフラットな状態で出れるのがベストやったと思いますけど。

鈴木 うーん。

野瀬 ほぼ、けんか分かれみたいな状態なので。

鈴木 あー。やっぱり、なんか心の中にいや、嫌な感じが残るんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。

野瀬 あ、でも、ほぼ、患者としては、縁を切ってる状態なので。

鈴木 うーん。なんかやっぱり、何ていうんですかね、考え方が全然違うっていう感じ、やっぱり受けます？ 病院の人と、地域の人っていうのは。

野瀬 そうですね。病院自体も、地域でのこういう生活はあんま知らんのかなっていう感じはしますけど。

鈴木 うーん。でも、本当は対立じゃなくて、なんかこう、話し合って、フラットで出たかったっていうことですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。でも、あの一、地域にはその、えっと、何でしたっけ。これ、何て読むんですか。ハリ、ハ。何ていう診療所でしたっけ、これって。

野瀬 梁山会。

鈴木 あ、梁山会っていうんですね。ここも、でも、医師ですよ。で、あと、訪問看護の響さんも看護師ですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 考え方で、全然、やっぱり違うんですか。

野瀬 全然違います。

鈴木 全然違いますか。

野瀬 出てから印象に残ってるのは、あの、宇多野やと褥瘡とかできたりしたらすぐ外出制限かけたり、移動の制限かけたりされるんですけど、ここ来てから、その管理、響の管理者の方が言わはったのは、「褥瘡とかになっても、外出できるように考えるので、どんどん外出してください」って言わはったのが、すごい印象的です。

鈴木 なるほどね。うん。

野瀬 訪問看護ステーションにも、もしかしたら、よるかもしれないんですけど。

鈴木 うん。

(無言)

鈴木 あと、あの、おうちのこのバリアフリーの状況って、快適な状況ですか。それともなんか、この辺がちょっとバリアがあるとか。

野瀬 入ってくるときに分かると思うんですけど、あの階段が。

鈴木 ですよ。

野瀬 一回一回、あの、スロープを出さな、(#####@01:20:43)。

鈴木 うん。

野瀬 それがなかったら、ま、割と完璧なんですけど。

鈴木 やっぱ、ないものですかね。こういうバリア、ない住宅って難しいんですね、やっぱり。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。今、生活保護を受給されてて。これはすぐ下りましたか。

野瀬 うーん。そうですね。退院して1カ月ぐらいで。

鈴木 うん。で、あとはあれですよ。あの一、えっと、JCのスタッフとして働くことに伴い、何か収入ってあるんですか。

野瀬 ほんま、おやつ買える程度ですけど。

鈴木 ああそうですか。じゃ、経済的にはある程度あれですか、うまく回ってるような感じですか。

野瀬 まずは生保と障害年金で回してる感じです。

鈴木 ああそうですか。あの一、ご家族のそのサポートってありますか。

野瀬 生保を受けてると、そのサポート受けると生保減らされちゃったり止められちゃったりするんで、受けてはないです。

野瀬 うんうん。

(無言)

鈴木 あと、あの一、あの一、ま、お父さんがすごく野瀬さんのことご理解ある方だと思うんですけど、JCILのことについても、まあ、すごく理解されてるってということなんですかね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。何ておっしゃってます？ お父さま。

野瀬 大藪君のこと昔から知ってはいるし。お父さんも信頼してるから、「いい友達を持ったな」とは言ってくれてました。彼がいなかったら地域には出られてない可能性はゼロじゃないんで。

鈴木 うん。

野瀬 なんか、どういった意味で、大藪さんの存在って大きかったですか。

鈴木 彼が JCIL にいてくれて、この人たちを連れてきてくれたのがおっしかったです。

(無言)

鈴木 あのー、退院された7月の、えっと、1日ですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 その日って、あのー、何ていうんですかね、こう、朝、出られたんですよ。

野瀬 朝、出ましたね。

鈴木 皆さん、こう、何ていうんですか、どんなふうにか、送り出してくださったんですか。

野瀬 うー。

鈴木 そこに主治医はいましたか。

野瀬 主治医、いはりました。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 2人とも。

鈴木 あ、そうですか。雰囲気ってどうか。

野瀬 雰囲気。ま、見送るときは、ま、明るくみんな送り、送り出してくれた感じだったんですけど。

鈴木 あ、そうですか。ふーん。励ましとか何か、言葉掛けもあったんですか。

野瀬 いや、そんなに。

鈴木 ハハ、そうですか。

野瀬 ま、気を付けて、みたいな。

鈴木 ハハハハ。でも、何ていうんですかね。いや、僕もなんか、そんな病院に、そんな長い間暮らしたことないから分かんないんですけど、子どもの頃からね、ずっと。6歳のときから十何年もいて、え、10、20年ぐらい。

野瀬 いや、17年。

鈴木 17年ですよ。お互いにこう、何ていうんですか、しり、知り尽くしてるというか。

野瀬 そうですね。

鈴木 その、何ていうんですかね、もう、それが離れる日ですもんね。退院する日って。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。

野瀬 まあ、玄関ぐらいまで来てほしかったんですけど。

鈴木 ああ。

野瀬 もう、病棟の入り口、誰もいなくなったり。

鈴木 あ、そうなんですか。うーん。

野瀬 そこも違うなって思ったんですけど。市立病院だと、ほんま、車のとこまで一緒に荷物持って出てきてくれましたけど。

鈴木 うーん。なんか、寂しいもんですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。で、あの一、座談会でもお話されてましたけど、あの一、1人前のギョーザとラーメンって、これっていつ食べられたんですか。

野瀬 退院して、多分、1~2週間ぐらい。

鈴木 あ、1~2週間。退院したその日って、お食事ってどうされたんですか。

野瀬 その日は、病院いた頃のまんま、注入で。

鈴木 あ、そうですか。で、じゃ、しばらく、じゃ、注入。

野瀬 1~2週間注入で。

鈴木 あ、はい。

野瀬 まあ、その、7月末ぐらいに日赤で、多分、どっかに書いてあったんですけど、その、嚙下造影って言って、飲み込みの問題ないかの検査をしてもらいにいくんですけど、何の問題もないって言われて。

鈴木 それは2週間後ですよ。

野瀬 いや、何の問題もないって言われたのは、多分、その7月の末。

鈴木 あ、7月の末。ということは、ごめんなさい、えっと、2週間ぐらいは注入して、で、検査いきますよね。

野瀬 ええ。

鈴木 いつで。

野瀬 2~3週間後。

鈴木 あ、2~3週間後に。じゃ、えっと、はっきり大丈夫ですよって言われる前から食べ始められてた。

野瀬 そう。訓練的に。

鈴木 あ、訓練的に。

野瀬 1年以上のブランクがあつて。

鈴木 ああ、はいはい。

野瀬 隠れて食べてたりはしたから。

鈴木 ああ。

野瀬 そう衰えてはなかった。

鈴木 ハハハハ。そういうときに役に立つってことですね。あ、あの、病院内の中で。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、はあ。ま、それはそうですね。

野瀬 食べないと衰えるから。

鈴木 え？

野瀬 食べないと。

鈴木 衰える。

野瀬 飲み込みも(###@01:27:43)、できなくなってしまうと。

鈴木 あー、なるほど。単におなかがすくからとか、そういうことじゃなくて。

野瀬 そうで、ほぼ、食べたいから食べたんですけど。

鈴木 ああ。でも、もう一方でなんかそれ、機能が落ちてしまうんじゃないかっていう不安もあつたってことですか。

野瀬 そうです。

鈴木 なるほどね。

野瀬 使わんと、弱っちゃいますから。

鈴木 そうですね。そうか。その、ごめんなさい、隠れて食べるって、その、ものはどう、どうされたんですか。その、食べ物は。

野瀬 その、大藪君とか来たときにこっそり持ってきて。

鈴木 あー、はいはいはいはい。それ、でもあれですよ、隠さなきゃいけないですよ、どこかに。隠せましたか。

野瀬 大藪君がいる間に食べて。

鈴木 ああ、なるほどね。

(無言)

鈴木 で、もう、全然食べれるじゃん、みたいな感じだったんですよ。うーん、なるほどね。じゃあもう、その、えっと、OK 出た後に、ギョーザ 1 人前食べたってことですか、ラーメン 1 人前っていうのは。

野瀬 いや。

鈴木 あ、その前？

野瀬 くん、訓練の段階で。

鈴木 ああ、訓練の。そうかそうか。それはもう全然、問題なく、もう。

野瀬 そうですね。そのとき、市立の言語聴覚士の方がリハビリをしてくださってて。

鈴木 へー。

野瀬 全然、問題ないって言うてはったんで。

(無言)

鈴木 あのー、お食事ってのは、基本的にもうあれですかね。基本、ヘルパーさんがつくる。

野瀬 そうですね。

鈴木 あのー、それはあれですか、あの、メニューってどんなふうによ、選ばれるんですか。

野瀬 僕が食べたいものをレシピ出して、それを見せて、これつくってくださいって。

鈴木 レシピって、自分で探されるんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。まあ、今はね、いろいろネットで探せば出てくるから。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。それはすんなりできまし、できますよね。何か、探して渡すだけですもんね。

野瀬 そうですね。ま、ただ、料理ができんヘルパーのときはちょっと厄介ですけど。

鈴木 あー。

野瀬 最近はおられないから、大丈夫なんですけど。

鈴木 そっか。ということは、任せるんだけど、でも、指示もしなきゃいけないですもんね。

野瀬 そう。できない人のときは。

鈴木 ああ。それって、あの、ごめんなさい、あの、どんな感じなんですか、その。長年、こう、別に料理はされてなかったわけですね、病院の中で。

野瀬 ええ。

鈴木 でも、それ指示するって、結構、難しいような気がするんですけど。

野瀬 そうですね。

鈴木 それも試行錯誤っていうか。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。なんかあの、あの一、要するに、自立生活始める前って、大体、自立生活プログラムを受けてやると思うんですけど、野瀬さんはそういうのってやられてないですもんね。いきなり本番みたいな。それはどうなんですか、その。

野瀬 うーん。友達のとこ遊びにいったりして、ある程度のイメージはついてたんで。

鈴木 あ、はい。

野瀬 そんな苦慮はなかったですけど。

鈴木 あー。ま、友達のとこに遊びにいったときに何となく。

野瀬 そうですね。ま、ヘルパーに指示してる様子とかで。

鈴木 なるほどね。そうか。

(無言)

鈴木 で、あの一、何ていうんですかね、病院にいるときって、あの、お代わりとかできなかつたと思うんですけど。

野瀬 ええ。

鈴木 こちらは、もう、その時々に合わせて。

野瀬 ええ。

鈴木 もう、自由にやってるってことですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、あの、栄養管理士って、多分、病院のときには栄養管理されてたと思いますけど、今はもうないじゃないですか、基本的に。

野瀬 え。

鈴木 それは特に、ふ、不安だったりとか何とかってことはないですか。

野瀬 うーん。一回、訪問看護の方に、ま、一応、訪問の栄養士さんもいはるんで、相談はしてみたんですけど。そういうのは(#####@01:32:51)、(*****ヨンダ@01:32:52)ほうがいいですかね、みたいな。

鈴木 うんうん。

野瀬 ま、ただ、その栄養士さん、割と無茶なことを言ってきたらみたいで。

鈴木 ふーん。

野瀬 ま、家に、家ではなかなか難しいような。その、1回当たり4品目つくれとか。

鈴木 フフン。

野瀬 多分、なかなか難しいやろうし。食材、何個使えとか。

鈴木 ああ。

野瀬 やっぱり、やめといたがよかったよって言われて。

鈴木 逆に。へー。普通、栄養管理士の人ってね、厳しいイメージありますけど。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、なるほど。あ、そうか。レクチャーは受けたけど、それはやってないんですね、じゃあ。

野瀬 ええ。

鈴木 あー。重訪の3号研修って、あそこまでやらないんですって。実際には。

野瀬 いや、実際にやるんですけど。

鈴木 ああ、はあ、はあ。

野瀬 3号研修ができる状態では、まだなかったから、取りあえずレクチャーだけして。

鈴木 あ、できる状態じゃなかったってのは、まだ下りてなかった。時間がってことですか。

野瀬 いや、もう時間は下りてたんですけど。

鈴木 はい。

野瀬 その、ヘルパー事業所も準備ができてなかったし。

鈴木 はい、はいはいはいはい。ふーん。じゃあ、レクチャーだけ受けて、でもやっぱりちょっとそれだと不十分だったということですね。

野瀬 そう。

鈴木 で、その次の日に、じゃあ、またあらためて。

野瀬 まあ、今もつづい、続いてはいるんですけど、3号研修は。

鈴木 あ、今でも？

野瀬 ええ。

鈴木 今でもそうなんですか。

野瀬 ええ。

鈴木 今でもやってないってことですか。

野瀬 やってない。

鈴木 あ、そうなんですか。

野瀬 やってない人のところもある。

鈴木 ふーん。やって、え、やら、やらなくてもいいんですけど、あれって。

野瀬 いや、本当は。ほんまはやらな駄目なんですけど。

鈴木 はい。

野瀬 さっき言った、違法性の阻却で。

鈴木 あー。

野瀬 ま、緊急時とかは、吸引してもいいよってというのが主治医から下りてて。

鈴木 あ、そうですか。今でもですか。あ、そうなんですね。

野瀬 でも緊急っていう扱いで、ま、吸引のときは吸引してる感じです。

鈴木 あ、今でも。あ、そうですか。あ、僕はなんか、研修受けるもんだと思ったんですけど、そういうやり方があるんですね。ふーん。え、それはどうしてそういうふうにされてるんですか。

野瀬 ま、一人一人だと訪看さんが教えなあかんので。

鈴木 ふーん。

野瀬 なかなか日が、お互いに合わないっていうのもあるとは思うんですけど。まあ、なんで今も続いているかは僕にも分からない。

鈴木 ああ、そうですか。でも、実際、ヘルパーさんがそれで吸引されるんですよね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。

野瀬 多分、よそでやってたりもしはるから。

鈴木 あ、なるほど。それは特に不安はないんですか。

野瀬 あー。ほんまにやったことあるんか、とかいう不安は、たまに。

鈴木 ふーん。

野瀬 人によってはあったりしますけど。

鈴木 うーん。それ、結構、あの、頻回にヘルパーさんってやるんですか、吸引は。野瀬さんの。

野瀬 いや、僕は最近、全然たんが。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 取れないんで。

鈴木 ふーん。

野瀬 訪看さん来たときぐらいしか吸引してない。

鈴木 なるほどね。あ、そういう事情があるってことも理由なのかもしれないですね。ふーん。あと、あの、お風呂って週何回入られてるんですか。

野瀬 今、週2回です。

鈴木 週2回。それはどういうサービスを利用されてるんですか。

野瀬 訪問入浴を使っています。

鈴木 あ。何曜日と何曜日ですか。

野瀬 月、金に。

鈴木 何時間ぐらいこちらにいらっしゃるんですか。

野瀬 僕んところは、40～50分ですけど。

鈴木 40～50分。訪問入浴っていうことは、介護保険か何かのサービスですか。

野瀬 そう、そうです。

鈴木 ふーん。あ、事業所として。

野瀬 ええ。京都市で。

鈴木 あ、京都市のね。

野瀬 週2回までしか認めてないから。

鈴木 ああ、はいはい。

野瀬 週2回しか入れないですけど。ま、実費で出したらいくらでも入れると。

鈴木 うーん。それはどう思われるんですか。週2回ってことについて。

野瀬 夏場とかはその、ぎとぎとなったりするので、もっと入りたいなと思いますけど。

鈴木 うーん。あの一、入浴自体の、何ていうんですか、ケアってのはどん、どんな感じですか。

野瀬 入院してる時よりも丁寧に洗ってもらえるんでいいかなと。

鈴木 うーん。

野瀬 特に、時間制限もないのに、病院のときはもう、タイマーセットして。

鈴木 ハッハッハ。ひどいですよね、あれは。入られるときってあれですか、何か、浴槽か何かをこちらに持ってこられて。

野瀬 持ってきて。

鈴木 で、ここで入られるんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 そのとき、ヘルパーさんも何か介助とか入るんですか。

野瀬 いや、その時間帯は。僕は特例で認められてやるけど、本来は重度訪問が、その時間帯は使えない決まりになってて。

鈴木 ああ、二重になっちゃうものね。

野瀬 僕は特例で使えるから。ま、吸引とかがある可能性がある。呼吸器管理があるんで、特別に下りてるんですけど。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 基本、手伝ってはないですけど。

鈴木 ああ、そうですか。で、あの一、なんかあの、やっぱり呼吸器付けてる方がお風呂入るって、結構、あの。何ていうんですかね、いろんなこと配慮しなきゃいけないって、まあ、大変だって話を聞いてるんですけど、それは野瀬さんとしては別に、心配なく入れてるって感じですか。

野瀬 うーん、管類さえ引っ張られたりしなかったら。

鈴木 うん。

野瀬 ま、お風呂なんで、喉に水が入らんようにしてくれる。

鈴木 はいはい。

野瀬 ま、それに気を付けてくれはったら、僕は大丈夫。

鈴木 あ、そうですか。じゃ、今、受けてるサービスっていうのは、まあ、その辺配慮して
いただいてるっていう。

野瀬 そうですね。ま、最初の頃、結構、管類が引っ張られたりして。ま、主治医の先生の
ほうから注意してくださって直った形ですけど。

鈴木 ああ、そうですか。ああ、そうですか、なるほどね。ま、じゃあ、あの、こういうふ
うにしてくれて言ったら、まあ、対応、すぐしていただけてるっていう感じですか。

野瀬 うん、そう。僕んとは。

鈴木 うん。

野瀬 あの、藤田さんも同じサービスをとって。

鈴木 ああそうですか。

野瀬 同じ事業所を使ってる。ま、トラブルが続いてあれ。

鈴木 トラブル。

野瀬 腕、打ったり、傷めたり。

鈴木 腕ですか。

野瀬 筋しつ、筋疾患系の方はどうしても、ま、ちょっとちやうほうをひねったりすると、
他の人でも痛いとは思いますが、なかなか治りが遅いんで。

鈴木 あー。

野瀬 1~2週間痛かったりするんで。

鈴木 あ、そうですか。うん。

野瀬 それに気を付けてほしいって、あの、何回か言ってるけど、なかなか直らなくて。

鈴木 あ、それは。ふーん。うーん。それは何で、そういうふうにあれなんですかね。時間に余裕がないんですかね。

野瀬 うーん。ま、それも1個あると思うんですけど。こないだ、話し合いの場に、僕の話し合いじゃないんですけど、に、参加させてもらったときに。

鈴木 藤田さん。

野瀬 うん、言っってはったのが、訪問入浴って話になるときに、時間がおしてっていうのはあってっていうのを、管理者の人が言っってはって。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 でも、制度上、時間が決まっているわけではないから、時間を延ばせるように調整しますって。まあ、それからどうなったかは、今は分からないですけど。

鈴木 うん、なるほどね。そっか。でも、野瀬さんとしても、やっぱりでも、お風呂の回数ほもうちょっと増やしてほしいっていう感じなんですかね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。やっぱ毎日ですか。入れるんだったら。

野瀬 できれば。

鈴木 うん。

野瀬 (###@01:43:59)、サービスで大概、昼間しかやってないんで。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 9時から、多分、5時とか。

鈴木 へー。

野瀬 僕も、仕事に行くの、9時から5時って、なかなか空いてないし、(#####@01:44:13)なんで。

鈴木 あー、そうですか。

野瀬 一応、夜やったら空いてるんですけど。

鈴木 なるほどね。普通みんなね、夜、入りますもんね。あ、夜、ないんですね。

野瀬 そう、そこ、僕の使ってるところはないですね。それは、そこが初めてなので。よそはどうかは知らないですけど。

鈴木 そうですか。うーん。

野瀬 なんで、今、もし週3にできたとしても、なかなか。週3にする余裕は僕にはないから。

鈴木 ああ、昼間じゃね。そうですか。うーん。

(無言)

鈴木 これは、あれですよ。(****ソウゴウシケンホウ@01:45:03)のサービスじゃないですよ、訪問入浴って。

野瀬 (#####@01:45:09)。

鈴木 でも、基本的に、まあ、週2回だったら無料ですもんね。

野瀬 そうです。

鈴木 うん。うーん、なるほど。洗濯っていうのは、ヘルパーさんがやるんですか。

野瀬 ええ。

鈴木 でも、ネット環境も全部整備されてるような状況ですよ。もう、いつでもできる状況ですか。

野瀬 今はそうですね、はい。

鈴木 ですよ。

野瀬 自分で電話して、業者に。

鈴木 はいはい。

野瀬 お願いして、線引いてもらって。

鈴木 今、Wi-Fi 入ってるような状況ですか。

野瀬 入ってます。

鈴木 じゃあ、ネット環境って部分で、何ていう、不備っていうか、不満なところってない。

野瀬 ないです。

鈴木 あと、ベッドだとかはどうですか。もう、基本的には、もう、かい、快適っていうか。

野瀬 ええ。

鈴木 これは、病院のときも同じような感じでしたか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。で、車いすもそうですよね。車いすはもう、病院にいるときからですか。今、使ってる。

野瀬 退院のときに、ちょうど作り替えて。

鈴木 あ、そうですか。作り替えたっていうのは、何かあれですか。理由があるんですか。

野瀬 うーん。ま、ちょうど体に合わんかなって思ったんで。

鈴木 あー。

野瀬 ま、褥瘡ができてたんで。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 宇多野から、これ、体に合っていないからやめたほうがいいって言われて。

鈴木 うーん。

野瀬 ずっと持ってなかったんで。

鈴木 でも、宇多野のときは、病院、あの、車いすは替えなっただけですね。

野瀬 いや、申請は出してたんですけど。

鈴木 うん。

野瀬 ま、業者が遅くて。退院してからになってしまっただけ。

鈴木 あ、なるほどね。じゃあ、特に自己負担はなく、改良できてるっていうことですか。

野瀬 そうです。

鈴木 で、持ち物なんかも、基本的にもう自由ですよ。病院の中と比べて。もう、どんなものでも、基本的に置かれるっていう状況でもんね。

野瀬 そうですね。

鈴木 やっぱ、やっぱ違うものですか、全然。病院と比べると。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。今まで置けなかったものが置けるようになったとか。

野瀬 そう。

鈴木 うん。

野瀬 壁にももの貼ったりできなくて。

鈴木 ああ、そうですね。で、朝起きる時間とかも、全部、自由ですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 寝る時間とか。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、服なんかも、あの、以前、病院だとタンクトップ無理、難しいっていう話を。今はもう、自由に。

野瀬 自由に、ええ。

鈴木 タンクトップ着るときって、外されるんですか。

野瀬 い、一瞬外す。

鈴木 一瞬外して。じゃ、それは全然、問題なく。

野瀬 ええ。

鈴木 うん。

(無言)

鈴木 で、ご飯食べる時間なんかも自由。

野瀬 そうですね。

鈴木 その日に、じ、自分でもう決められるってことですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 やっぱり、その辺りも、やっぱり、いいなって感じですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 うん。あと、間食なんかも、ね、以前はおやつ、食べれなかったっていう状況ありましたが、今はもう。

野瀬 自由で。

鈴木 うん。

(無言)

鈴木 アルコールなんか、飲まないですよ。

野瀬 僕は飲まないです。

鈴木 もともとね。

野瀬 ええ。

鈴木 生き物って飼うことができるんですか、このアパートっていうか、マンションは。

野瀬 一応、駄目ってなってんですけど、周り見ると結構、犬とか猫とか飼って。

鈴木 ハハハ。それは野瀬さんは、別にかわ、飼いたいとは思わないっていうことで。

野瀬 いや、飼いたいとは思いますが。

鈴木 あ、思ってます？

野瀬 ハムスターは飼ってるんですけど。

鈴木 あ、今、飼ってるんですか。あ、そうですか。それはな、病院の中でできなかったことですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 やっぱ、それ、飼いたいなと思ってたってことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。世話かなんかは、あれですか、もう、ヘルパーさん。

野瀬 ヘルパーに指示して。

鈴木 ああ、指示してね。いや、僕もあの、ハムスター飼ってたことがあります。

野瀬 ああ。

鈴木 結構、寿命、短いですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、掃除なんかもヘルパーさんが基本的に。

野瀬 そうです。

鈴木 指示してってことですか。なんか、今までこう、あの、何ていうんですかね、その、指示してやってもらうってこと、多分、なかったと思うんですけど、それって最初、やっぱり大変ですか。やり始めた頃って。

野瀬 うーん、そうですね。病院とかやと勝手にやってくれるんで。

鈴木 うーん。

野瀬 そこは楽なものではあったんですけど。

鈴木 うん。でも、いざじ、自立生活になると、自分である程度、指示しなきゃいけないっていう(#####@01:51:29)。

野瀬 そうですね。ただ、事業所によってカラーがあるので。

鈴木 あー。え、どんなカラーですか。

野瀬 JCIL やと、基本、僕らが言わんと行動はしない。

鈴木 ハハ、なるほど。

野瀬 他の事業所とかやっても、言わんでも時間になったらやってくれたりとか。

鈴木 へー。え、ちなみにごめんなさい、今、野瀬さんが、あの一、利用してる事業所って、どちらなんですか。JCIL と。

野瀬 と、シュシュっていうところと。

鈴木 うん？

野瀬 シュシュ。

鈴木 シュシュ？

野瀬 と、ココペリっていうところ。

鈴木 あ、ココペリさん。はいはい。

野瀬 まごのてっていうところ。

鈴木 まごのき？

野瀬 まごのて。

鈴木 まごのて。

野瀬 ていうところと。

鈴木 あ、はい。

野瀬 家族舎。

鈴木 家族舎。

野瀬 その五つです。

鈴木 あ、そうですか。えっと、いずれも重訪のヘルパーの事業所ですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 これ、あの、ごめんなさい、五つあるっていうのは、これはご自身で決められたんですか。

野瀬 うーん、いや、いくつか僕がお願いしたところ、なるんですけど、ま、それ以外は JCIL が見つけてくださったり、他の事業者から紹介して下さったりっていう感じです。

鈴木 逆に、あの、やっぱり五つぐらい確保しとかないと、野瀬さんに必要な介助者ってのは確保できない。

野瀬 そうですね、こないだまでは四つやったんですけど。介助者が辞めたり。

鈴木 ああ。

野瀬 病気をして足りなくなったり。

鈴木 うん。

野瀬 別のところに入ってもらったっていう感じで。

鈴木 ああ。

野瀬 今、四つ、五つが。他にも多い人とかは、10個とか入ってる人もいられる。

鈴木 あ、そうですか。ちなみに、今、介助者って、野瀬さんは何人ぐらい。

野瀬 全員で、30人以上ぐらい。

鈴木 30人以上。ふーん。皆さん、男性ですか。

野瀬 いや、時々、女性も。

鈴木 時々、女性。

野瀬 ま、9割男性ですけど。

鈴木 それは特に、女性でも大丈夫っていうものなんですか。

野瀬 僕は、大丈夫っていうふうに言ってたんですけど。最近気付いたのが、ま、病院やとみんな白衣着てはるんで。

鈴木 はい。

野瀬 何の違和感もなかったんですけど、私服で介助されると、ちょっと違和感があるというか。

鈴木 あー。

野瀬 やっぱり、嫌やなっていうふうに思うようになりまして。

鈴木 あー、なるほどね。白衣と私服って違うんですね。

野瀬 なん、そうですね。

鈴木 うーん。

野瀬 訪看さんとかも、ユニフォーム着てるので、何のあれも思わないんですけど。

鈴木 はい。

野瀬 まだ、確かに昔、知り合いの看護婦さんと出かけたときも、トイレ介助してあげるよって言われたけど、なんか断りました。

鈴木 ああ、なるほどね。男性の介助者希望されたときに、やっぱり男性って集まります？ちゃんと。

野瀬 うーん。ただ、女性介助者不足のほうが深刻っていうふうに、JCIL では聞いているんで。女性よりは集まりやすいのかなと思いますけど。

鈴木 ああ。でもやっぱり、こう、若い人が多いんですかね。

野瀬 介助者がですか。

鈴木 ああ、はい。

野瀬 うーん。いや。

鈴木 そうでもないですか。

野瀬 割と、年いった人のほうが。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 多いんじゃないですか、どう考えても。

鈴木 うーん。でも、辞められる人も結構多くて、みたいな。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。

野瀬 大抵、みんな腰、壊したりとか多いですね。

鈴木 ああ、そうですか。うーん、なるほどね。ちょっともう、にじ、2時間ぐらいたちましたので、ちょっときょうはこれで終了したいと思います。すいません、ありがとうございます。

(了)